

孤立している人はアルコール依存症になりやすいのか

源田香穂 山本泰輔

【はじめに】

退職、離婚等、アルコール依存症患者の生活史を追うと、孤立状態がきっかけとなった発症が多い印象がある。また、新型コロナウイルスがいまだ収束しない中、自宅での大量飲酒の危険性を伝えるニュースが報道されている。孤立の定義としては、家族や社会との関係が希薄で他者との接触がほとんどない状態として「社会的孤立」が提唱されている。日本全国で行われた訪問面接調査では自営業、正職員、非正規職員、学生、専業主婦、無職で比べた場合、アルコール依存症の生涯経験者割合は男女共に非正規職員と無職で多かった。本研究では、「孤立している人はアルコール依存症になりやすい」という仮説を検証することを目的とした。

【方法】

孤立 (Isolation) と飲酒 (Alcohol) をキーワードとして、PubMed で英文文献検索を行った。

【結果】

文献検索の結果、日本の研究 1 篇とイギリスの研究 1 篇を得た。日本の研究では、男性においては、専門職と比較してサービス職・運送業・建設労働者であること、失業率の高い地域に居住することが 1 日あたり日本酒 2 合以上の過度の飲酒の危険性を高めた。女性においては、離婚、家事と比較して専門職・事務職・販売職・サービス職であること、1 人あたりの所得が高い地域での居住、失業率の高い地域での居住が過度の飲酒の危険性を高めた。女性の方が男性に比べて居住している地域と飲酒との相関が高く、社会参加を伴う都市化は過度の飲酒の可能性を高めると考えられた。イギリスの研究では、男性においては、独身、別居、離婚、健康的な食事をしないこと、高所得、教育水準が高いこと、喫煙本数が多いことがハイリスク飲酒の危険性を高め、子どもがいる世帯、孤独は危険性を低下させた。女性においては、高所得、教育水準が高いこと、喫煙本数が多いことがハイリスク飲酒の危険性を高め、家族の介護をすることは危険性を低下させた。

【考察】

2 つの研究を受け、家庭内・家庭外・地域社会の 3 つの枠組みで考察する。家庭内で考えると、離婚・別居は飲酒リスクが高く、子供がいる世帯・家族の介護をすることは飲酒リスクを低下させた。そのため、家庭内で孤立する人は飲酒リスクが高いといえる。家庭外、職業面からみると、女性の社会進出、男女ともに高所得・高学歴は飲酒リスクが高い。そのため、社会適応の良い人は飲酒リスクが高いといえる。地域社会では、居住地域の失業率が高く、コミュニティ機能が弱いことは飲酒リスクとなるといえる。

研究の限界としては、2 つの論文はアルコール依存症ではなく過度の飲酒を対象としていることである。そのため、今回の研究からは「孤立している人はアルコール依存症になりやすい」という仮説を立証することは完全にはできなかったが、孤立とアルコール依存症の関連が認められた。家庭内での孤立、地域社会での孤立はアルコール依存症になりやすくなる可能性があり、一方で職業面での社会適応の良さは必ずしもアルコール依存症を防がない可能性がある。